高等学校　国語科学習指導案

授業者　　今井　真由美

日　　時　　平成 30 年 10 月 17 日（火）　第６限（14：20～15：10）
場　　所　　多目的教室
学年・組　　高等学校　Ⅱ年１組　38 名（男子 21 名　女子 17 名）
教　　材　　小説『ひよこの眼』（三省堂　『現代文Ｂ』改訂版）
目　　標　　１　時の流れと場面，状況を整理し，主人公の心情の変化を読みとる。
　　２　作品の表現・構造上の工夫をとらえ，語り手の意図をつかむ。

【学習指導要領　現代文Ｂ　指導事項イ】

指導計画（全５時間）

第一次　初読後，感想や疑問を記入する。　１時間
第二次　本文を読解し，主人公の心情の変化を読みとる。　３時間（本時３/３）
第三次　表現の工夫と，「私」がこの物語を語る意図を考え，物語文にまとめる。　１時間

教 材 観

『ひよこの眼』は，1990（平成２）年に「小説現代」10 月号に掲載され，1995 年度版三省堂『現代文』の教科書に採録されて以来，四半世紀近く採録され続け，高等学校「現代文」の準定番教材に位置づけられると言える。中学３年生の男女が登場人物であるため，学習者にとっては身近な設定の中で，生と死，他者との関係性についての思索を導く作品である。

『ひよこの眼』の初読の感想を書かせたところ，半数近く見られたのは，「悲しい恋愛の物語」としての読みであった。たしかに，いわゆる恋愛小説であると言っても間違いではないが，そうすると，現在の「私」が，「街の雑踏の中」や「電車の中」で出会う「ひよこの目」を持った人に「尋ねてみたい衝動に駆られてしまう」場面があることの意味はどう捉えればよいのだろうか。牛山恵氏は，「山田詠美『ひよこの眼』の教材価値」（『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ』）で，「『ひよこの眼』との出会いは，『私』にとって、自分は見続けるほかに何もできないという，死の問題とかかわりきれない自分自身を確認することであった。語り手は，死の不条理に向かって生きる真摯な生を語るとともに，それとかかわることのできない孤独な生を語ったのである。」と述べている。このように，『ひよこの眼』は単なる恋愛小説ではなく，「生と死」を描いた物語であると考える。そのため，現在の「私」がなぜこの物語を語ったのかを考えることで，学習者の「悲しい恋愛の物語」という読みから踏み込み，その先にあるテーマに迫らせたい。また，篠原武志氏は，「『ひよこの眼』の教材価値と実践試論」（「同志社国文学」2007 年）で，「語り手である『私』に、幹生を、センチメンタルに追悼しようとする意図は希薄であろう。むしろセンチメンタルな追悼という範疇を越えて，幹生の死を冷徹に受けとめようとしている。『私』は幹生の死を悼んでいるというより，『人生に対して礼儀正しい人』が死ぬという不条理を憎んでいるのである。」と述べている。初読の感想では，「人生に対して礼儀正しい人」という表現の意味をつかみかねているというものもいくつかあり，この表現に着目することで，『私』の心情に迫るとともに，単なる恋愛小説から「生と死」を描いた物語としての読みへとつなげていきたい。

本時の目標

１　本文の叙述に即して登場人物の言動・心情を読みとる。　【読むこと】
２　作品の語りの特徴を理解する。　【読むこと】

本時の指導計画（３時間目／３時間）

	学習活動	指導・支援上の留意点	評価
導入	前時までの振り返り	○「私」と幹生との仲が接近し，「私」は幹生の瞳を懐かしいとは思わなくなったこと，「私」が持つ好意がどのような感情であったかということを確認する。	
展開	１　音読する。 ２　「私」が感じた「懐かしさ」の正体をとらえる。 **発問：ひよこの目と幹生の目の共通点は何か。** **発問：「恐ろしさのあまり恋をしてしまった」とはどういうことか。** ３　幹生の死についての「私」の心情を読みとる。 **発問：「人生に対して礼儀正しい」とはどういうことか。この表現には「私」のどのような思いが表されているか。** ４　あくまでも語り手である「私」の視点に基づいて語られている内容であることを確認する。	○５段落を音読する。 ・指名により音読させる。 **○死を見つめている瞳** **・澄んだ瞳** **・何もかもを映しているようで，何も見ていない目。** ①　両者とも死を予感している ②　何もしてあげられず，見続けていた私　を確認する。 **○漠然とした不安（恐さ）やなすすべがないことを忘れたい（逃避したい）ために，恋だと思い込んでしまった（錯覚した）。** ・「しまう」は不本意な結果に至ることを言う場合が多い。 **○つらい人生に対して逃げ出すことなく、前向きに立ち向かおうとしていた姿勢。** ・幹生のこれまでの人生がどのようなものだったかを本文から押さえる。 ・「のに」は予期に反した結果になった事についての不満の気持を表す。 ○ひよこの瞳と幹生の瞳は同一のものとされているが，本当にひよこと幹生は完全に重なるのか，他者の目から見た「ひよこ」と「幹生」の描写にも着目させる。	・本文の叙述に即して登場人物の言動・心情を読みとることができる。（発言の内容） ・本文の叙述に即して登場人物の言動・心情を読みとることができる。（発言の内容） ・作品の語りの特徴を理解している。（発言の内容）
まとめ	本時の学習内容の振り返りと，次時の予告を聞く。	○題名にある「眼」と本文中に出てくる「目」「瞳」との違いを考えることと，語り手である「私」がこの物語を語る意図について考えることを伝える。	

実践上の留意点

『ひよこの眼』は，中学３年生の男女が登場人物であり，学習者にとっては身近な設定の作品である。今回，授業で扱うにあたって，初読の感想・疑問を書かせるところからスタートした。これは純粋に生徒たちがこの作品をどう読んだのかを知りたいと思ったからである。初読の感想では，「悲しい恋愛の物語」というものが半数近くを占めており，作品に描かれる「生と死」の問題に触れたものはあまり見られなかった。また，疑問も持たずに「わかったつもり」で読んでいる生徒も半数近く見られた。そこで，単なる「恋愛の物語」としてだけの読みから，「生と死」を描いた物語としての読みへと深める授業を構想した。生徒から初読の感想で，「『人生に対して礼儀正しい』の意味をつかみかねている」，「『恐ろしさのあまりに，恋をしてしまった』とはどういうことか」などの疑問が挙げられていたため，今回の授業で中心発問として取り上げることとした。３つの発問を中心に据え，幹生の「目」とひよこの「目」との共通点に気付いた亜紀の心情に迫りながら読みを深め，６段落（現在の「私」が，ひよこの目をした人に「あなたは，死というものを見詰めているのではありませんか」と尋ねてみたい衝動に駆られる部分）につなげていこうと考えた。

実際に研究授業で扱った場面において，研究協議では，「その目の『恐ろしさのあまり恋をしてしまった』という発問のところで，もっとはっきりと答えを出せば良かった」とのご指摘をいただいた。また，「この時点での『恐ろしさ』とはひよこの目を見たときのはっきりしない恐怖，死を迎えるものに感じる恐ろしさであろう。『何とかしてあげないと』という使命感が恋に変わる，とりつかれて目が離せないから見続ける，それが恋に変わるということだと言える。」，「この『恐ろしさ』とはこのまま真っ直ぐ行くと『死』，そういう恐ろしさだということを言い切って良かったのではないか」などのご意見をいただいた。

本文の表現を見ていくと，「私」の語っている世界は死を忌避しているように見え，そこから「私」は死を知っていながら，死を語れないのではないかと考えられる。この語りがどういう言語行為かを考えることも必要である。また，「語り」という面から見たとき，６段落にも着目すべきである。５段落で終わっても物語としては成立するのに，わざわざ現在の「私」がひよこの目をした人に尋ねてみたい衝動に駆られ，慌ててしまうという部分が付けられている。６段落がなぜ必要なのかを問うことは，語りの構造とその意図を考えるということにつながる大切な問いである。

また，ことばが切り口になる作品なので，「切ない」「自分勝手」「懐かしい」「恐ろしい」など，語としてキーワードになるものを押さえていくとよい。

本作品では，「私」から見た「幹生」の姿が大部分を占めているが，その視点は限定的なものである。全５時間の授業を通して，「私」の視線だけでなく，他者の視線にも目を向けるよう注意を促してきた。このような描写にも着目させ，語りの特徴を捉えることで，生徒たちの読みが深まったと感じられた。